

しなやかな思考を育てる感性教育の一考察

－ 感性教育に関する中高校アンケート結果分析を鑑みて －

池田紀子（前啓明学園中学・高等学校部長）

[I] はじめに

源氏物語「もののあはれ」、枕草子「をかし」は平安の薫り高い作品の理念である。当時の文化をあらわす代表的なこれらの作品は、平安人の感性が著されているものであり、現代の日本人の感性に通じるものである。感性は世界各国共通のものであるが、それぞれの国自体の感性があることは、環境や文化の違いがあることから事実であろうが人間だけに与えられた物であることも事実である。

さて、混沌としている現在の世界にあって将来を担うべき青少年の感性はどうであろうか、今回、「感性教育を考える研究会」を立ち上げ今後の学校教育および社会における感性の「はぐくみ」をどうしたらよいか研究を開始した。まず、全国の学校での感性に対する考え方や感性教育の実態をアンケート調査という手法で始め、関東、東海地方の学校640校近くにご意見を聞いた。結果240校から回答を頂き、分析した。各学校とも様々な方法で何とかして感性豊かな子供たちを育てようとの努力があり、他の学校の手法を学びたい、教師の感性を磨かねばならないといった意見が多く、研究会の使命も重く受け止めたいとの結論に達した。

また、最近、あらゆるジャンルで「感性」の必要性が問われている。例えば経済分野では、「株は感性で」、工業関係では、「物作りの感性」、経営面では、「感性のある経営者」、そしてもちろん教育、「教員の感性」等々、つかみ所のない曖昧模糊としているこの「感性」の定義は色々なところで様々な解釈がなされ使われているようだ。「感性」とは何か、情操とか教養とかとの違いがあるのかなのか、感性は環境や教育から育むことができるか、また育むものではなく天性のものなのだろうか。ますます研究課題が増してきている。

[] アンケート質問事項

1. 各学校の「感性教育」について

生徒の感性を引き出し育むために組まれている教育課程の内容について

2. 1. の活動開始の動機 3. 活動費 4. 費用負担方法 5. 活動の担当者

6. 生徒に受けさせたい感性教育の夢

7. 研究所開催の研修会への意見 企画内容 実施時期 実施場所

[] アンケート結果

1. 各学校での取り組み

まず、「芸術鑑賞」やはり様々な文化芸術関係の鑑賞が圧倒的に多いことがわかる。感性を育む方法として本物に接することの大切さをどの学校もまず考えるところであるようだ。現代劇舞台・ミュージカル・映画・オペラなどから、古典芸能歌舞伎・能・落語などプロの演じるものを本物の劇場で鑑賞させる場合と学校に招聘し体育館などで鑑賞させる場合とがある。まさに視聴覚教育から感性を引き出そうというものである。また、「美術館・博物館・芸術館見学」を行っている学校も多い。美術館でのワークショップも行い絵画からの感性を培うものである。

次に「国際交流」による感性教育、海外で、他国の文化や風習に接しコミュニケーションを豊かにすることを大切に学ばせる。方法として、語学研修・修学旅行・帰国生や留学生受け入れ・姉妹都市交流など様々だが広く世界を受け入れて視野を広くすることで感性の豊かさを身につけさせることの大切さを重視するところも多い。

「ボランティア活動」により一人ひとりの感性を促す手法も多くの学校で見られる。地域清掃・病院、老人ホームなどでの奉仕、楽器演奏・募金活動・植林ボランティア、ある工業高校では車いすの修理をし「空飛ぶ車いす」と文字通り修理した車いすを東南アジアなどに送っている。車いすを必要とする海外の人に思いを馳せ真剣に取り組む高校生の感性は素晴らしいものである。

「校内音楽会」はほとんどの学校で行っているが生徒全員によるオーケストラや地域も一緒にクリスマス大合唱を行うところもある。

「自然体験」自然とのつながりを重視し自然から学ぶ感性教育が各学校の取り組みから見られる。フィールドアスレチック・サイクリング・林間学校・里芋、サツマイモ作りなどの農業体験から土に接し自然の恵みに感謝できる感性の育成、醤油造りや労作教育の大切さを教える教育を行っている学校も多くある。自分たちの使う校舎の清掃も業者に頼む学校もある昨今、トイレ掃除なども生徒自身の手で直接清掃させる学校は「これぞ感性教育」という意見である。また、登山・ハイキング・乗馬教室・競歩大会・スキー教室・磯観察・飯盒炊飯等に加えてエコ観察や校内にある樹木札の設置、世界の名画を校内廊下などを始めいたる場所に展示をしたり校庭内の整備に励んだりなどの工夫、ISO14001を取得し、学内でのリサイクルにつとめ生徒の自覚が環境問題に敏感になっている例もある。

「宗教活動」は35校の学校が回答しているが、私立学校では宗教色を建学の精神にしているところも多く宗教活動からの感性を育むことがわかる。聖歌隊ハンドベル演奏での施設訪問であったり修養会や殉教学徒慰霊祭であったりとそれぞれの活動に違いがあっても各学校の持つ宗教から様々に活動がされ、その行事の中から感性の涵養がなされる。

「職業体験」からその生徒の持つ感性を考えている学校も30校ある。今、進路指導では早くからのキャリアガイダンスが言われ、自分の感性にあった職業選びが始められていることから職場企業訪問・職場体験が行われているようだ。

「講演会」講演者に知名人や保護者・卒業生を起用し生徒の感性に響く話を聞かせる学校が多い。テーマは文化・福祉・教育など様々であるがその道に精通した先輩の話を聞かせることによって生徒たちの多くが自分に置き換えて追体験をすることが大切であろう。保護者にあらかじめ自分の専門を登録してもらい講演者としてお願いをし、生徒たちの感動を呼んでいる例は多くあろう。その他、戦争体験者による聞き書きや生徒たちが実際に弁論したり、メッセージを送ったり自分の考えを述べる場を多く作り同世代の友人の意見を聞く機会を作っている学校もあるが、大切なことである。その他授業に取り入れる華道・茶道・箏・や百人一首・礼法マナー・座禅・読書会・武道・アロマセラピー・朝のクラシックなどそれぞれの学校の取り組みは多岐にわたっている。

しかし、感性教育は日常的なものであり取り立てて何をするというものではない・心の教育ということで「感性」というよりも「愛情」や「心」なので特別なことではない・「人のお話しをしっかりと聞くこと」・教育課程に位置づけられているものは全て感性を引き出し育むものとして実践しているという回答もいくつか見られた。

2. 活動の動機

上記のような活動の動機になったことを聞いたところやはり、「教育方針の実践」・「情操教育の必要」・「建学の精神の指針」・「教育理念の具現化」・「一流の芸術家、生の芸術に接すること」・「国際感覚の体得」・「ボランティア精神の体得」・「人間力を身につける」・「個性尊重」・「日本人としての価値観自覚」等が多い意見であるが、「中高6年間一環を機に」・「コース立ち上げを機に」・「中学校併設を機に」・等の学校組織変革を機として感性教育についての行事を考えた学校、「授業改革の一環」・「総合的学習として」などの授業改革を契機とした学校また、「自己の将来設計のための実体験」や「他者への気配り」等様々であるが全体的に創立当初から学校の方針で行うところが多いようだ。しかし、少子化の折りから「入試対策」や清掃活動などは「地域の誘い」であったり、「文化祭の質を高めるため」という対外的に考えるとところからの発想もあるようだ。

3．活動費

活動費用に関しては、大体の学校で一つの行事あたり3000円以下であり、プログラムによっても違いが生じている。国際交流に使う場合は修学旅行や語学研修ではかなりの費用負担で論外である。ここでの質問は観劇などの金額が主であったが、かなりバラバラである。5000円以上という催事もあり歌舞伎座などの観劇では弁当込みで5000円ということもある。

4．費用負担に関して

全額生徒負担が圧倒的に多く98校が回答した。中には半額生徒で後は学校負担残りはPTAより負担、全く生徒負担なしも数校あった。

5．活動担当者

芸術科担当者・視聴覚担当者・学校行事担当者・図書担当者・学年、教科・総合学習担当者など様々だが校長・教頭、全教員・企画により異なるという学校もある。

6．どのような感性教育を受けさせたいか、「夢」を聞かせてほしい。

「各ジャンルの本物に触れさせたい」が圧倒的に多く、その中には優れた芸術や人物に接することで心を豊かにさせたいと願っている学校が多い。知的好奇心を喚起するもので芸術的な体験・活動の充実に努めたいと考えている。もちろん日本文化の深い理解のための一流芸術家による公演やワークショップ―一流本物の体験、本気で取り組ませることの大切さを感じている。一流の演奏家と共演できる内容、演奏家との触れあいから学ぶプログラムの開発、講座形式でなく五感、特に味覚や触覚が感じられるような内容のプログラム作り、コミュニケーションをのばせるような感性教育の充実などの新しいプログラムの作成。また、「生徒たちが自らの力で生き生きと創作活動の場を作る体験をする参加型」で外国との交流・福祉教育・自然との共生・協同生活体験などがあげられる。「宗教的な情操感覚に基づく自然や人間を大切に作る感性を育みたい」ということで生命尊重や人間本来の姿に立ち返りゆったりとした人間関係を築く場所を作っていきたい。世界平和と隣人愛、思いやりに結びつく機会を持たせたい。感謝する気持ち、理性の奥にある感性を刺激することを自然に身につけさせる。等々沢山の「感性を育てる夢」を各学校の現状にあわせて聞くことが出来た。現状で満足・特に夢なし・現在充実など解答頂けなかったものを含め60校に上った。(これらはごく一部であり、アンケートの結果は全体のまとめとして研究所のホームページに掲載の予定であるので参照してほしい。)

7．研究所主催研修会への要望

過去6年間にわたり研究所主催の感性教育研修会は参加人数が不足、現在休止になっているわけであるが、研究会としてこれからの企画を立てて行く上での希望や参考意見を聞いた。「各学校の取り組みを知りたい」・「各学校での実践例を聞きたい」・「本物を題材にしたユニークな前例の紹介がほしい」・「教員の」心を磨く講座の開設」・「個人の中に眠っている感性を目覚めさせるワークショップ」・「感性教育の基本的講演が聴きたい」・「真に豊かな人間性を育てるための教育課程について」など沢山の意見要望があった。

これまで感性教育研修会の知らせ方法が必ずしも適当でなかったことは反省であるし、要望の中にも折角送られてきてもどの分掌に紹介したらいいか迷うことが多く改善の余地があるとの指摘も納得できる。ただ、以前の参加者からは高い評価をもらっているのも事実であることから今後ホームページなどを使い出来るだけ浸透させるよう努力したい。

研究所で研修会を行う場合の時期として、圧倒的に8月夏休みの希望が多い。いつでも良い・学年度末・企画に会わせて随時などの時期もあるが、いずれにしても先生方の出やすい時期を設定するのが良いと考える。

実施場所は都内がトップだが企画にふさわしい場所を選ぶのが良い・京都、大阪等関西地区や県単位、地区ブロック単位での実施の希望も出ている。

[] 終わりに

アンケートの結果から見えてくるものは何か、各学校とも生徒の感性をいかにしたら育むことが出来るかの工夫がよくわかる。単に芸術的なものを鑑賞させれば済む問題ではないこともよくわかるが、アンケートに寄せられた要望では、実践している例を知りたい、実際に実施している先進的事例を紹介してほしい等の意見が多く見られどの学校もなかなか決定的なプログラムの作成には苦労があるようだ。本物と接したい、鑑賞だけでなくワークショップも取り入れてほしい、教員の感性を磨かなければ生徒の指導が無理であると言ったご意見に後押しされて今後の「感性教育を考える研究会」でのテーマは明確になって来たことは収穫である。今後、本研究会ではテーマに沿って研修会をシリーズ化していく方針である。

第1回は4月5日に歌舞伎と能のコラボレーションということで国立能楽堂の「マクベス」舞台公演と出演者とのワークショップを実施する。「授業が変わる、自分が変わる」というキャッチフレーズで歌舞伎役者から声の出し方所作を学ぶワークショップである。声の出し方一つで生徒の注意を引きつけることが出来るか、教員が変われば生徒も変わる、楽しい学校生活を過ごすヒントを見つけてもらえたら良い。今回は年度初めて先生方がいそがしいとき、保護者や生徒も一緒に楽しめるようになっている。東洋と西洋の和合が演じられる舞台をそれぞれの持つ感性で鑑賞してほしいと企画したものであり、今回を契機として今後いろいろな工夫をしていく予定である。もちろん芸術鑑賞のみでなく広い視点で「感性教育」を作り上げていく自信でいっぱいである。

生まれつきみんなが持っている良い感性を大人になって摩滅させないようどこかの時点で、あるいは日常的に意識させていかなければならないと感じる。学校教育の中で無論学力を上げ、知識をつけさせることが大切ではあるが、人間が生きていく上に大切なものは何かしっかりと見定め、将来の社会を担う青少年に平和で明るく豊かな人生を送ってほしいと願わずにいられない。

夕日の沈む色に、本の芽の息吹に、鳥の声に、道ばたの草花の一本一本に、かすかな風の音に敏感な心になり、その時々風景や人とのつながりに感謝する心、これらが「感性」。今、「お母さん、聴いてみてウグイスが鳴いてるよ。」の当時5歳の息子の声に「今忙しいからあっちに行ってて。」と言ってしまった昔の自分を思い出しながら苦笑を禁じ得ないし、「なんて感性のないことよ。」と反省しきりではある。若いお母さんが、手を引きながらも車が通る側に子供を歩かせている姿は、やはり「感性」のあるなしの問題かと考える。ちょっとした心の持ち方、思いやりの心、これが感性の大切な定義なのではないだろうか。

最近、日本人の精神構造はダブルスタンダードと言われる。イエス・ノーをはっきり言わず、「はい、でも」といってしまう。もしかしたら、この曖昧さが日本人の感性かと感じるのは変かもしれないが、もともと婉曲用法が発達している日本においてはこれも「感性」なのだろうか。

アンケートから見えてきたもの、見えてこないもの、まだまだ研究課題は山積である。